

産業振興審議会 (R4. 5. 23) 委員からの意見

1 新規林業就業者数について

高橋 昌勝 委員 (商工部会, 産電工業 (株) 代表取締役)

- ・人工林が利用期を迎えているとのことであるが、新規就業者数が 40～50 人前後という現状では、材料はあるが人がいない、という状況になり、今後大変ではないかと思う。

木村 明子 委員 (水産林業部会, 宮城中央森林組合 総務課長)

- ・林業の新規就業者数については、森林組合でも年間 2～3 人程度であり、その要因としては、希望者が少ないということの他に、一度にたくさんの人を雇えないという現状がある。
- ・林業の作業は機械を使用したり、資格が必要であったりと、育成に大変時間がかかり、他産業と比べ、一人で働けるようになるまでに時間がかかる。
- ・みやぎ森林・林業未来創造カレッジが本格スタートし、新規就業者の確保を後押ししていただきながら、事業体としても確保に取り組んでいきたい。
- ・一方で、新規就業だけでなく、いかに長く働いてもらえるかということにも力を入れており、今後、数を増やすというよりは、長く働いていく人、技術を持った人を増やすといった視点で見えていただければ良いと思う。
- ・100人という数だけではないところに目標を設定しても良いのではないか。

水野 暢大 委員 (水産林業部会, 水野水産 (株) 代表取締役)

- ・現在の計画を見ると、研修会の開催などにしか触れていないが、後継者の育成という部分が重要と考える。
- ・環境と成長の好循環というテーマを共に学んでいける、魅力を感じてもらえるような環境を作っていかなければ、後継者の確保は難しい。
- ・国内で生産・循環できる素晴らしい素材と環境に合った職業であり、今後の日本にとっても重要な職業であると、多くの若い人が理解するチャンスをもっと計画の中に盛り込んでも良いのではないか。
- ・木を育てるには人を育てるという観点がもう少し強くても良いのではないかと思う。

内田 龍男 会長 (会長, 東北大学名誉教授)

- ・森林に若い人たちがどんどん入ってもらうためには、一つは魅力を感じてもらうこと、もう一つは価値が高くなること、工業系を入れて効率を上げていくなど、色々なことが考えられると思う。

2 木質バイオマス導入施設数について

高橋 昌勝 委員 (商工部会, 産電工業 (株) 代表取締役)

- ・木質バイオマス導入施設数について、目標値を上回っているが、材料となる木質チップは県内で生産されたものを使っているのか。
- ・4～5年前は地元からの木質チップの供給が難しく、県外産や輸入品を使用していた。
- ・地元の材料を使うのが一番だが、経験上、どうしてもコスト高となってしまう、使えないのが現状のため、コストダウンしながら使っていけるような仕組みになると良いと考える。

3 間伐実施面積・経営計画策定率

木村 明子 委員（水産林業部会，宮城中央森林組合 総務課長）

- ・森林経営管理制度が進まない問題は，おそらく，森林の境界が明確ではない点ではないかと考える。
- ・森林施業や経営計画の策定に取り組んでいく中で，いかに境界を明確にして，施業を行えるかというところを解決する具体的な取組を計画の中にも入れ込んでいただきたい。
- ・また，林地台帳が導入され，どれだけ効果を発揮するかというところであるが，市町村の状況によっては進んでいないところも多い。こういった点もうまく活用できるような取組を盛り込んで行って欲しい。

4 再造林について

木村 明子 委員（水産林業部会，宮城中央森林組合 総務課長）

- ・森林所有者の現状として，70～80代の方は林業の大切さや山の手入れの大切さも理解しているが，その下の世代については，山はお荷物という考えの方が多く，山に対する価値観が下がってしまっている状況であり，40年後に向けて木を植えようという気持ちになりにくい。
- ・再造林に重点を置いていく上で，所有者の現状と，安心して再造林に取り組めるような制度を明確に提示いただけると良いかと思う。

5 県産材を使用した木製品の設置について

高橋 知子 委員（商工業部会，（株）緑水亭 若女将）

- ・観光の立場として，日本は外国に比べてベンチが少ない。
- ・宮城県は東北ならではの自然を楽しむ観光地が多く，そういった観光地にCLTベンチなど，宮城県の木で作ったベンチがあれば，子どもたちも林業に興味を持つのではないか。
- ・観光地にも，木を使ったベンチなど，人が集うようなものがあれば良いと考える。